

“いまだ語られざる”
アジア・世界の中の日本近現代のあゆみ

シリーズ 日本の開発協力史を 問いなおす

全7巻

戦後日本の歴史、知、国際実践を
開発協力から照らします初めての試み

- 第1巻 日本型開発協力の形成
- 第2巻 最大のドナーの登場とその後
- 第3巻 開発協力の思想史
- 第4巻 国際教育協力の系譜
- 第5巻 インフラ協力の歩み
- 第6巻 開発協力のオーラル・ヒストリー
- 第7巻 開発協力のつくり方

東京大学出版会

発刊によせて

日本は1954年10月6日、コロンボ・プランへの参加を決定し、1955年から研修員の受け入れ、専門家の派遣など、政府ベースの技術協力を開始した。これが日本の政府開発援助（ODA）の始まりであり、今でも10月6日は国際協力の日とされている。

その頃の日本は、壊滅的な敗戦から9年、サンフランシスコ講和条約の締結（1951年）と発効（1952年）によって独立を回復したばかりだった。ODAといえば、通常、先進国から途上国に対して行われるものであるが、日本は1964年に経済協力開発機構（OECD）への加盟を認められ、先進国の一員として認められるよりも10年も前から援助を開始したのであった。それは、いったい何故だったのだろうか。

その後、日本のODAは1990年代、金額において、ほぼ世界一となった。

しかし、日本の援助のあり方については、他の先進諸国から批判が絶えなかった。東南アジア等の東アジア地域を中心としていて、より貧しいアフリカへの援助が相対的に少なかったこと、有償借款が多かったこと、紐付き（tied）援助が多かったこと、などである。

これらのうち、アフリカ等への援助は増えたとし、tiedは修正されたが、その他の点は変わらなかった。

しかし、「樹は実によりて知られる」（マタイによる福音書）という。日本が協力を深めた国々は発展した。これは紛れもない事実である。日本の国際協力には、日本自身が非西洋から発展した最初の国家であったという歴史と、敗戦から立ち上がった歴史が、刻み込まれている。

日本のODAは2000年頃から金額的には減少し、一般会計ベースでピーク時の半分、支出純額の順位で言えば、世界の第4位程度である。伝統的なドナー以外の援助国も、中国をはじめとして増えている。さらに、公的資金よりも、民間資金の比重が増えている。

このような状況で、戦後の日本の国際協力の歴史を振り返ることは極めて意義の大きいことと考える。

さらに、2019年末から世界に広がった新型コロナウイルスの感染は、世界の構造、秩序を変えてしまうような歴史的な出来事である。自国第一主義や権威主義が広がる中で、世界の持続的な発展のためには、国際協調は今まで以上に重要であり、ODAを通じた日本の国際協力が主導的な役割を果たすべきである。

国際協力機構 理事長、東京大学名誉教授

北岡伸一

シリーズ 日本の開発協力史を問いなおす

全7巻

A5判・横組・上製・240～320頁
各巻定価（本体3,000～5,000円＋税）（予価）

▶国際開発協力を、第二次世界大戦後の日本における「国際関係構築」の数少ない積極的手段と位置付け、その実態を多角的視点から明らかにする

▶対象となった国や人々の声を聞くとはどのようなことか、日本側の政治的過程、思想の移り変わりとはどのようなものか。国際協力を歴史的に評価する視座を考える

▶途上国という他者に向けられてきた近代日本の顔、語られてこなかった自らの近代史に出会う本格的単著によって構成されるシリーズ

▶JICA緒方研究所（国際協力機構 緒方貞子平和開発研究所）の研究プロジェクトとして一線の研究者が参画した成果

注 文 書		※もよりの書店へお申し込みください
<input type="radio"/> 全7巻申し込みます		（ セット）
① 日本型開発協力の形成	ISBN978-4-13-034220-9	2020年11月刊 本体3,400円＋税 （ 冊）
② 最大のドナーの登場とその後	ISBN978-4-13-034221-6	（ 冊）
③ 開発協力の思想史	ISBN978-4-13-034222-3	（ 冊）
④ 国際教育協力の系譜	ISBN978-4-13-034223-0	（ 冊）
⑤ インフラ協力の歩み	ISBN978-4-13-034224-7	2021年3月刊 （ 冊）
⑥ 開発協力のオーラル・ヒストリー	ISBN978-4-13-034225-4	（ 冊）
⑦ 開発協力のつくり方	ISBN978-4-13-034226-1	2021年1月刊 （ 冊）

[書店名] (取次番線)	[お客様のご住所・ご芳名]
	[電話番号]

東京大学出版会 〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29 TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991 http://www.utp.or.jp/

第1巻 日本型開発協力の形成

——政策史①・1980年代まで

…下村恭民（法政大学名誉教授）

日本を取り巻く国際環境は時代と共に大きく変容したが、それに対応して日本がどのような進路選択の政策決定を行い、その中で開発協力はどのような役割を担ったのか。政府開発援助（ODA）のみならず民間部門の活動を含めた途上国への協力全体を、一次資料を活用し、時代の文脈に留意しつつ、一貫した枠組みで分析する通史の上巻。その「日本的」な性格とその背景を洗い直し、戦後日本の国際経験を再構築する。

はじめに——焼け跡の日本で、なぜ経済協力だったのか

序章 開発協力政策の歴史を考える視座

第1部 被援助国から援助国へ

- 第1章 廃墟からの復活と開発協力の黎明——賠償協定調印とコロンボ・プラン加盟まで 1945-1954年
- 第2章 援助国への道——高度成長の開始からOECD加盟まで 1955-1964年

第2部 援助大国への道

- 第3章 国際環境の変容とODAの急速な拡大 1965-1979年
- 第4章 東南アジアの「反日」と開発協力政策の変容
- 第5章 日米経済摩擦の衝撃と開発協力政策の変容

第3部 「21世紀的なドナー」を求めて

- 第6章 「もう一つのアプローチ」の形成

終章 単眼から複眼へ——なぜ「もう一つのアプローチ」なのか

第2巻 最大のドナーの登場とその後

——政策史②・1990年代以降

…下村恭民

戦後の黎明期から量的拡大を経た第1巻に続き、1990年代以降から現代への流れを追う通史の下巻。「トップドナー」日本の開発協力は、独自の知的資産を活用して行われた、当時支配的な開発協力潮流への挑戦の過程でもあった。その後、経済停滞による量的優位喪失の中で、日本の「もう一つのアプローチ」はどのように変容していったか。「良きドナー」と「国益」の間で、日本の開発協力の今後の可能性を考える条件を模索する。

はじめに——「2つの時代」の物語

序章 本書の狙いと分析枠組

第1部 トップドナーとしての「国際貢献」努力

- 第1章 「国際貢献」言説の高まりと「ODA大綱」導入
- 第2章 民主化支援への政策対応
- 第3章 「国際平和協力」と「平和構築」——失われた環とその意味
- 第4章 「貧困の主流化」への対応
- 第5章 アフリカへの取り組み——TICADの軌跡を中心に
- 第6章 地球環境問題への取り組み——なぜ優位性を喪失したのか
- 第7章 市民参加の潮流への対応

第2部 トップドナーとしての対外発信——東アジアの経験に基づいた提言の試み

- 第8章 世界銀行への働きかけと「東アジアの奇跡」
- 第9章 知的支援の記念碑としての「石川プロジェクト」

第3部 中国の変容は日本の開発協力を何をもたらしたのか

- 第10章 最大の開発協力対象としての中国
- 第11章 巨大ドナーとしての中国

第4部 黄昏の援助大国のジレンマ——「良きドナー」のふるまい、「狭い国益」の復活

- 第12章 援助協調への傾斜——「良きドナー」あるいはジュニア・パートナーへのサポート
- 第13章 「人間の安全保障」の旗の下に
- 第14章 「狭い国益」の前景化
- 終章 「ポスト援助」の時代への貢献を求めて

第3巻 開発協力の思想史

——帝国の形成から21世紀まで

…高橋基樹（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）

日本

日本および日本人は、開発途上国（地域）の「他者」と向き合い、支援することを一体どのように考えてきたのか。植民地や占領地を含む歴史的関係において、思想家・研究者だけでなく政策とその実践の「知」と「思想」が経た変遷と創造の通史。研究者と実践者との直接間接の共鳴というある種の「知的共同体」が出会った普遍的課題、アジアさらにはアフリカへの共鳴、そして「国益」とのジレンマ……。開発協力というレンズを通じた、日本近代知の履歴を振り返る。

中国

序章 開発協力の思想史——近代日本における現実主義と理想主義

第1部 日本の開発協力思想史——連続と断絶

- 第1章 近代日本における国際貢献思想と植民政策学
- 第2章 暗い谷間の時代——世界観とアジア観
- 第3章 敗戦後社会における国際協力の思想

第2部 開発協力の形成・展開と学術知・実践知

- 第4章 開発協力の開始と日本（——1960年代）
- 第5章 開発協力の展開・多面化と「途上国」へのまなざし（——1970年代）
- 第6章 拡大期の日本の開発協力と思想の分裂（——1980年代）

第3部 開発協力の成熟と思想

- 第7章 「歴史の終わり」以後の日本の開発協力とその思想（——1990年代）
- 第8章 成熟期の日本の開発協力と思想（——2000年代）
- 第9章 変動する世界と開発協力——近年の変化と今後の展望（——2010年代）
- 終章 開発協力をめぐる理想主義と現実主義の相克と対話——その軌跡と展望

第4巻 国際教育協力の系譜

——越境する理念・政策・実践

…黒田一雄（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）

日本

近代という時代は、「国民教育」の時代でもあった。日本の近代教育史もその成功であれ反省であれ、かつては帝国の境界、戦後は日本国の国境の内の空間で語られてきた。しかし前史を含めればほぼ近代日本の全時間軸を共有する「国際教育協力」は、周辺的なエピソードに過ぎないのだろうか。日本が当事者となる国際関係の中で、語られた理念と価値観、行われてきた実践を位置づけ直し、「もう一つの近代日本の教育経験」を明らかにする。

序章 国際教育協力とは何か

第1部 国際教育協力の理念的視角——なぜ国際教育協力を行うのか

- 第1章 国際社会の求める価値からのアプローチ
- 第2章 国際関係論・比較国際教育学からのアプローチ

第2部 日本の国際教育協力の史的展開

- 第3章 国際教育協力前史——明治後期・大正・戦間期
- 第4章 国際教育協力の黎明——第二次世界大戦後から1960年代まで
- 第5章 「人づくり」のための国際教育協力——1970年代から80年代まで
- 第6章 教育のグローバルガバナンス形成と日本——1990年代から2000年代まで

終章 日本の国際教育協力政策・実践の理念的展望——未来に向けて

第5巻 インフラ協力の歩み

——自助努力支援というメッセージ

…山田順一（国際協力機構副理事長）

日本

日本の開発協力は、アジアへのインフラの輸出と整備を中心に据えたものであった。負の影響である環境問題、住民移転などの社会的問題にも向き合いつつ、それぞれのプロジェクトは何を目指し、諸外国の援助と比べてどのような特徴があったのか。戦後賠償と東南アジア、輸出振興と南アジア、中国への「国づくり」の支援など、土木的な成果ばかりが目目されるインフラ開発に込められた「自助努力支援」の思想に、その実際からアプローチする。

はじめに

- 第1章 インフラ協力史——帝国エンジニアから自助努力支援へ
- 第2章 インフラ協力の理念と効果——ODAは本当に貢献したのか
- 第3章 インドネシア——日本は真の友人だったのか
- 第4章 ミャンマー——「ビルメロ」達の援助は何を残したのか
- 第5章 フィリピン——米国の肩代わりから安全保障へ
- 第6章 ベトナム——インフラとガバナンス
- 第7章 タイ——フロントライン国家はどう変貌したか
- 第8章 中国——ODAのレガシーを残せるか
- 第9章 インド——シーソー・ゲームの行く末
- 第10章 インフラ事業を成功に導くもの——日本ならではの差別化へ

第6巻 開発協力のオーラル・ヒストリー

——危機を超えて

…峯陽一（同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科教授）

日本

開発協力を歴史的に評価するとき、対象の声を聞くことは最も重要なことであるが、人びとの多様性、時間による変化は、それを最も難しい課題ともしている。本書は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカのプロジェクトに現地側で関わった人びとを訪ね、オーラル・ヒストリー（口述史）の方法で、援助する側される側の関係性に特に着目し、開発プロジェクトが命を吹き込まれて動き出す現場の、生きられたリアルに迫ろうとするものである。

- 第1章 声を記録する——開発協力の口述史
- 第2章 水の恵み、人の恵み——農漁村の現場
- 第3章 モノづくり、人づくり——製造業の現場
- 第4章 学校は誰のものか——教育の現場
- 第5章 健康への権利——保健医療の現場
- 第6章 人間の安全保障に向かって

第7巻 開発協力のつくられ方

——自立と依存の生態史

…佐藤仁（東京大学東洋文化研究所教授）

日本

日本は相手国の「自助努力」を援助するという。しかし、「自立」「自力更生」という発想を植民地であった国々から考えるとどう見えるか。協力の結果、借款や技術を介した先進諸国への依存を深めた事例、逆に「自立にとって依存が役立った事例」など、自立と依存の生態史が見えてくる。開発協力を当事者の「意図」でなく「さらされていた圧力環境」に注目する本書は、「時の経過」を経て初めて見えてくる変化を多様な当事者の視点を往復することから解き明かし、従来の「援助言説」をまったく新しく再編する。

中国

序章 開発協力を引き出す力

第1部 走り出す経済協力——1954～65年前後

- 第1章 自立の夜明け——戦後日本を東南アジアに押し出した力
- 第2章 開発の東南アジア——援助の受け入れ体制はどうつくれたのか
- 第3章 逆風の現場——信頼が国境を越える条件は何か

第2部 経済協力から開発援助へ——1966～89年前後

- 第4章 後発援助国への圧力——日本はなぜ「援助大国」になれたのか
- 第5章 権威主義国家の援助吸収——援助は東南アジア諸国家にとって何だったのか
- 第6章 続出するODA批判——「問題案件」はなぜある時期に集中したのか

第3部 開発援助から開発協力へ——1990年代から現在

- 第7章 開発協力と「人間」の発見——日本のODAは人間をどのように見てきたか
- 第8章 塗り替わる援助地図——新興ドナーは伝統ドナーを置きかえるか
- 第9章 「問題案件」のその後——批判は地域の自立につながったのか

終章 開発協力を促す力